

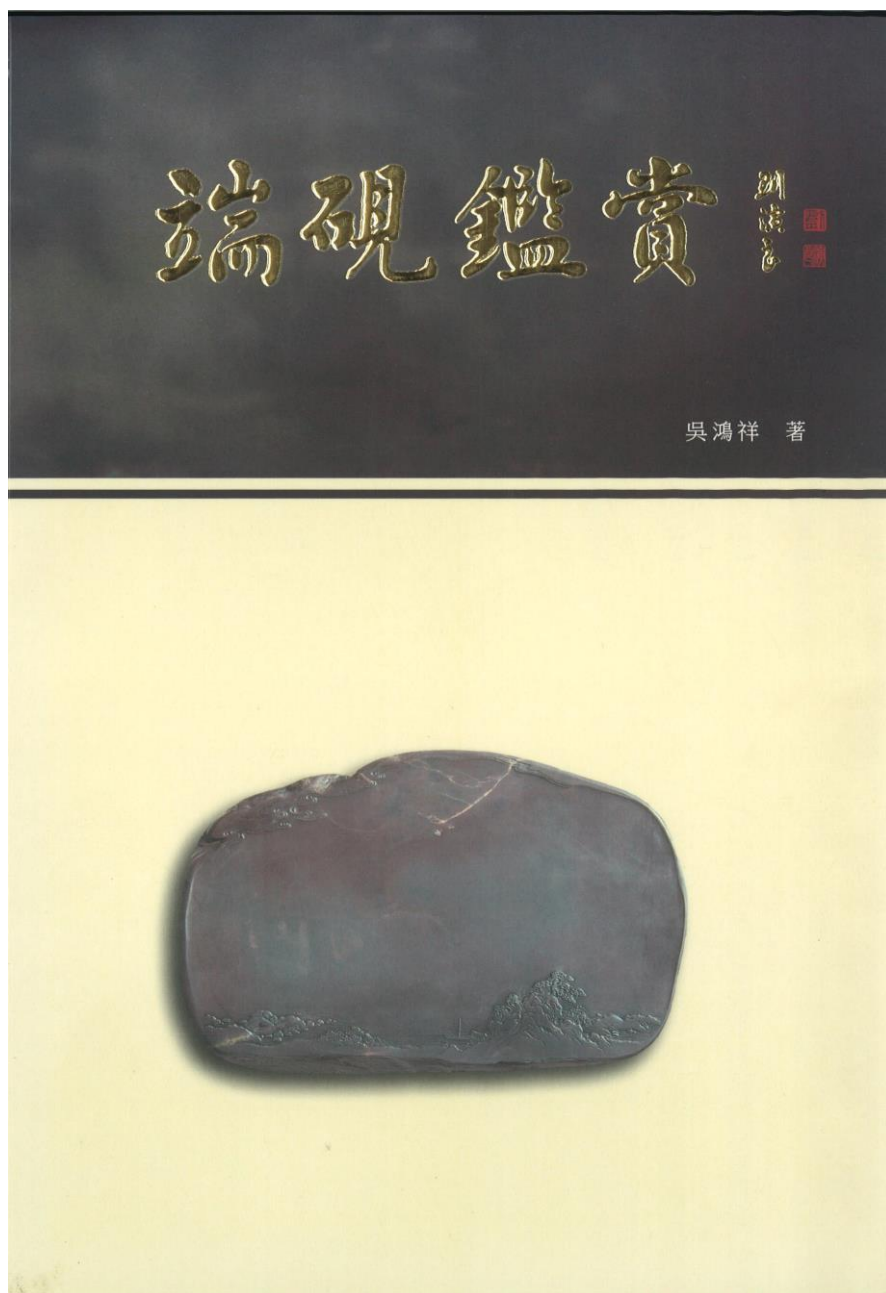
はじめに

呉鴻祥氏は1957年生の台湾人で2000年に「認識端硯」を出版し、弊社が2010年翻訳出版しました。

その当時、氏は既に「端硯鑑賞」を発刊しており内容も更に詳細な文章でした。

ここでは、その中から幾つかの文章を翻訳してみました。

「端硯鑑賞」も「認識端硯」同様にすばらしい画像がたくさん有りますので是非この著書を購入して端硯の奥の深さを堪能してみてください。



水坑と旱坑 「水坑」と「旱坑」は対になるものです

端溪硯の「水坑」と「旱坑」について、その起源を考証するのは難しいのですが、最も代表的なものは麻子坑の「水坑」と「旱坑」です。

筆者は1997年に端州の友人・李漢炎に連れられて、雑草の生い茂る荒れた林の中で、廃止された二つの麻子坑の原始洞口——「水坑」と「旱坑」を探しだしました。二つの原始洞口は清の乾隆年間に採掘が始まったもので、下にあるのが「水坑」で、上にあるのが「旱坑」です。二つの坑の距離は5メートルも離れていません。「水坑」の坑内は泉の水が雨のように滴ることからその名がつけられました。石質は一般的に「旱坑」よりも優れています。

麻子坑は長期の採掘によって、次々と数十の坑が掘られ、一部の坑から採れた石は、水坑で採れたものと同じようにきめが細かく潤いがあり、もともとの「水坑」に勝るとも劣らないものでした。やがて「水坑」と「旱坑」は次第に石質の枯、潤を表す「形容詞」となり、特定の「坑名」を指すものではなくなりました。今では習慣的に、石質に潤いがあるものを「水坑」と呼んでいます。

現在、肇慶の端溪硯「業界内」では、「水坑」と「旱坑」という区別はなく、ただ石質の優劣、枯潤によってその価値が決められています。世間で言われている「水坑」「旱坑」というのは、坑内に水が溜まり水没した「灌水」以降に広まった伝聞と、「剽窃家」が本に書いて広まった話なのです。

老坑、旧坑、新坑

これは「老坑」でしょうか、「新坑」でしょうか？ よく、端溪硯を指して、私にこのように尋ねる人がいます。

端溪硯に関して言うと、実は「老坑」と「新坑」にはまったく関係がありません。あるいは、肇慶の業界内にこのような分け方はないとも言えます。すでに述べた通り、端溪硯の老坑とは名詞で、「水巖」を指す言葉です。

「老坑」「新坑」というのは歙州硯に見られる言い方です。両者は相対的なもので、採掘が始まった時期の古今、前後で区分されるものです。歙州硯の「老坑」は、また「旧坑」と呼ばれ、開掘年代の古い坑を指します。例えば、眉子坑・羅紋坑・金星坑・水舷坑などです。それに対して「新坑」はそれ以降、または近年新しく採掘されたものを指します。

世間では、硯について論じる際によく老坑、旧坑、新坑という言い方をします。開掘年代の古いものを「旧坑」といい、新しいものを「新坑」といいます。同じ坑（品種）で採れたものならば、古い時代の石を「旧坑石」、現代のものを「新坑石」と呼び、そして、習慣的に「旧坑石」は「新坑石」よりも優れていると強調します。

たとえ同じ 20 世紀に採れた石でも、60 年代、70 年代のものを「旧坑石」として、「古いものは新しいものより優れている」とみなすのは、骨董収集の考え方を新しい硯に強引に植え付けたものです。これら様々な言い方はまったく売るための宣伝文句であり、もしこれを本当だと盲目的に信じるのであれば、それは実に愚かなことです。

人について論じるのであれば、経験は宝であり、年齢は大切な要素となります。しかし、硯の石質を論じるのであれば、その素材こそがすべてであり、「年齢」（採掘年代）などはまったく関係のないものです。

端溪硯では、同一坑であっても採掘時期が異なれば、石質の特徴や優劣はすべて異なります。古いもので今のものよりも優れているのもあれば、今のものの方が古いものよりも優れているものもあります。あるいは、優劣が交互に現れる場合もあります。

例えば、老坑は唐代に採掘が始まり、採石坑は地下に向かって 45 度で開削されています。地表に近いものの石質は比較的平凡で、下へ行くほど石質はよりきめ細かく潤いのあるものとなります。このことは、世に伝わる古硯が証明しています。そのため、老坑の古硯には良い石があまりなく、明清以降に採取された石に優れたものが多いのです。

清『宝硯堂硯辨』に云う「坑仔巖に天青なく、魚腦凍と蕉葉白は柔らかで溶けず……」というのは、当時の状況であり、20 世紀末に坑仔巖から採掘された良い石には、天青宝藍が一面に広がり、魚腦凍や蕉葉白も瑞々しく、玉の様な美しさがあります。本書掲載のこの二つの硯がその事実を証明しています。また同時に「旧坑は新坑よりも優れている」という説が必ずしも正しくないことも示しています。

1962 年から麻子坑での採掘が再開され、すでに 40 数年が経ちました。これは、端石が採掘されてから最も長く、規模が大きく、採掘量も最も多い期間です。石質の優れたものも全体として、歴代産出の石を超えました。これはなにも昔を蔑み、今を持ち上げているわけではなく、現在に伝わる硯が証明している事実なのです。

端溪硯の研究は、時代的要因を考慮して、先人の積み重ねた基礎の上に実践を通して、必ず実物に当たらなければならない、伝聞や言い伝えに依ってはならないのです。

古い線装本に見られる私達の祖先の論述は、当時の考証条件の不足という制限のため、どうしても一方的、一面的な見方になっています。現在、昔から言われてきたいくつかの説が誤りであることがわかっています。そのため古い本ばかり読んでいるとますます正しいことがわからなくなってしまうのです。

例えば、清《端溪硯史》の作者・呉蘭修は、一度も肇慶を訪れて実地調査をしていません。そのために、斧科山の硯坑分布図を間違っって描いています。さらに「剽窃家」がそれを信じて書き写すので、ますます誤りが広まっていくのです……。

古硯の歴史的、文化財的価値は新硯よりも高い。これに異論はありません。しかし、一概に「古硯は新硯より優れている」と決めつけたり、「旧坑は新坑よりも石質が優れている」と言うのは、物事を自分で考えようとせず、思考が停止していると言うほかありません。

石脈

端溪硯の石材は採掘によって得られます。しかし、端溪硯の石材が採れる鉞山は、その山の石全てが硯となるわけではありません。鉞山には鉞脈、つまり石材の脈（岩床）があり、俗に「石脈」と呼ばれています。採掘は石脈に沿って進まなければならない、硯の「石材」となるものを採取し、硯にならない「石」は山に廃棄します。

「石脈」とは即ち、「石材」のある場所のことです。石脈は地殻運動によって、大部分はねじ曲がり分断されています。そのため、端溪石の石脈は、厚かったり薄かったり、時には切れたりしています。石脈が途絶えることを「断脈」といいます。

開坑して断脈にあたると、その坑を諦めて去る者もあれば、粘り強く掘り続ける者もいます。開坑は博打のようなもので、石脈の予測は難しく、石脈に当たれば富を得られますが、見つけれなければ元手はもとより、破産することさえあるのです。

坑仔巖と老坑の石質の特徴は近く、二つの鉞区は直線距離で約 300 メートルしか離れていません。そのため、二つの坑は同じ石脈だという説もあります。山が形成される際に石脈が分断されて二つに分かれ、ひとつは上に押し上げられて坑仔巖となり、もう一つは地下へと沈み老坑になったというのです。

この仮説に科学的根拠はないものの、このような考え方は合理的なものです。地質学的に言って、300 メートルほどの距離であれば互いに関係がある可能性は否定できません。いつの日か、老坑と坑仔巖が地下でつながっているところが発見されるかも知れません。

底板、石肉、頂板

端石砧の構造は、底板、石肉、頂板の三つの部分に分けられます。採掘した石材から石質が粗雑な「頂、底板」を取り除き、「石肉」を使って硯を作ります。しかし、石肉の中にも傷があるので、良い部分を残して良くない部分を取り除いて、ようやく良い硯となります。

一般的に言って、「底板」は石質がもろく、不純物が多く、「頂板」は硬く、単一な色調です。頂、底板には通常、石紋はありません。「石肉」は石の精華（もっとも優れた）の部分で、きめ細かくつやがあり、石品（石の種類）が豊富です。

硯をつくる時は「石肉」の精華を取って「硯堂」（墨堂）とします。石の精華が最も現れる「硯堂」は、美人の顔のようなもので、愛硯家の注目を誘い、金をかき集め、こぞって手に入れようとさせるのです。

端石は採掘される坑によって、鉱物の成分と構造が異なります。大まかに言って、比較的材質の優れた坑は、その頂、底板と石肉の特徴がはっきりしています。材質が平凡な石材は、頂、底板が不明瞭で、ものによっては頂、底板の区別がほとんどなく、そのため、石材の使える部分の割合が高くなります。

古人が硯をつくる際には、頂、底板は不用な部分と見なしていました。しかし、現代では硯をつくる「版図が拡大」しています。山水や龍鳳が彫刻され、彫刻が重なり合い、見るのが追いつかないほどです。これは現代人が硯の「大きい」ことを良とするからで、その影響で、大きい硯がつくられるのです。

三大名坑の「石肉」の大きさは、薄いもので 10 数センチメートル、一般的なもので 30 センチメートル程度、60 センチメートルを越えるものではありません。そのため、大きい硯であっても、「硯堂」の大きさはすべてこの範囲内です。

「ギネス世界記録」に認定される巨大な硯も、三大名坑以外のものは除かれており、端溪硯の坑を鑑別する際の参考となります。

上蠟（蠟を塗る）

「上蠟」は現代の端溪硯製作の工程のひとつです。硯の彫刻が終わると、磨き上げた後に蠟を塗ります。

一般的に、蠟を塗る前にまず「墨つけ」をします。その方法はまず墨汁を白酒で希釈し（白酒は揮発性が高いので、硯面に墨あとがのこりにくい）、筆で墨汁を彫刻や傷のある部分に

塗り、その後、蠟を塗ります。

蠟は一般的に蜜蠟を使用します。また床板用のワックスを使うひともいます。

蠟を塗る手順は、まず硯を加熱し、その後蠟を塗ります。蠟は熱で溶けて硯の表面に保護膜を形成します。

昔の方法は、炭火で硯があぶって熱してから、蠟を塗りました。また、お湯で温める方法もありました。欠点はあとからカビが発生しやすいことで、今ではほとんどこの方法はしなくなりました。

現在最もよく用いられている方法は「ガスバーナー」で熱して蠟を塗るもので、とても効率的です。最も安全なのは「ドライヤー」で加熱する方法で、低い温度でゆっくり温めるために、硯にひびが入りにくく、安全性の高い方法です。

蠟を塗る際は「安全」に注意しなければならず、硯を温める方法は、硯によって変えなければなりません。

三大名坑は多かれ少なかれひびが隠れているので、接着剤を使うこともあります。接着剤は高温になると変質してしましますが、「ドライヤー塗蠟法」を用いれば、ゆっくりと加熱でき、高温で硯にひびが入ることを防げます。ある硯友が蠟を塗る際、硯をガストープの上に置いてあぶっているのを見て、冷や汗をかいたことがあります。

硯に墨をつけ蠟を塗ることで、加工の際の白っぽいのみ痕が消え、硯の色調が更に深くなり、落ち着き、石の模様が更にはっきりします。蠟を塗ることで空気が遮断され、潤いを保ち、埃や塵、汚れを防ぐ作用もあります。

「墨をつける」ことである程度、醜い部分を覆い隠すことができます。硯堂は硯の精華なので、通常、墨を塗ることはありません。とくに、石質がきめ細かくつやがあり、石品が豊かな硯堂は、その風格で見る人を引きつけるので、「墨をつける」ことで醜さを覆い隠す必要はありません。ただ石質の劣る石や偽物の古硯が硯堂を真っ黒にして誤魔化そうとするのです。

蠟を塗る伝統的な方法では木炭で硯をあぶって熱し、蠟を塗ります。熱で蠟が溶けて、硯の表面に保護膜が形成されます。現在は多くがガスバーナーで加熱しています。この方法はとても効率的です。また、細かい部分はドライヤーを使って加熱します。

蠟を塗る前：蠟を塗る前の硯は白っぽく、目を楽しませるものではありません。

蠟を塗った後：墨をつけ蠟を塗ると、白っぽいのみ痕がなくなり、硯の色調は更に深く、石の色、石品模様がはっきりします

退蠟（蠟を落とす）

せっかく興味が湧いて硯を買ったのに、いくら磨っても墨がおりない……このような状況は、硯や墨の品質に問題がなければ、おそらく硯の蠟を落としていないためでしょう。硯の製作工程には、材料を選ぶ、サイズを測る、切断、設計、彫刻、磨く、箱をつくる、蠟を塗る、そして最後に「退蠟」（蠟を落とす）という工程があります。

退蠟というのは「硯堂」表面の蠟を取り除くことです。硯は蠟を落としてようやく磨墨の際に滑らずに使用できます。

退蠟の伝統的な方法は、棕櫚で杉炭と水を硯堂で円を描くように擦り、蠟を取り除きます。炭はアルカリ性で、石鹼や歯磨き粉と同様に油分をとる性質があり、蠟を落とすことができます。そのため、蠟を落とす簡便な方法として、歯磨き粉を使うこともできます。蠟を落とす目的は墨を磨るためです。そのため、「観賞硯」であれば通常、蠟を落とす必要はありません。

退蠟：伝統的な方法では棕櫚に杉炭の粉をつけて、硯堂で円を描くように擦って蠟を落とします。杉炭の粉はアルカリ性のため、油、蠟を取り除くことができます。簡便な方法として、歯磨き粉でも蠟を落とすことができます。硯堂の蠟を落とせば、滑らずに墨を磨ることができます。

白端

白端は端溪硯を代表する品種の一つで、良いものは玉のように白く、光を通してみると象牙のような、白い中に透き通った黄色味があります。石質の劣るものには赤い筋と黒い筋があります。

白端は肇慶の風光明媚な星湖（別名：七星岩）で産出されます。明の時代に「風水」保護のため採取が禁止されました。しかし、禁止されても、上に政策があれば、下に対策ありで、いつの時代も隠れて儲けようとする者がいました。

ここ数年来(2000 年前後)、肇慶で見かける「白端」の多くは外見が似ている偽物です。広西省から来たものや、広東省雲浮市の雲石があり、同等かそれ以下のものに、河北省の「漢白玉」があります。色が白くて傷がなく、自然光の下で見るときらきらと光が反射するのがみえます。総じて、これらの「ニセ白端」の石質のつやは、本物の白端には及びません。

白端は、堆積した岩石中の石灰岩が変質して生成し、成分構造は大理石と同様です。白端と

大理石は同じ成り立ちで名称の異なるものとも言えます。鉱物は成分の相違、産地によって名称が異なるため、その価値も自然と異なります。

白端は朱砂を磨るのに適しています。しかし、墨を磨るのには適していません。「白い顔が黒い顔に変わり」、せっかくの白端が台無しになってしまいます。

白端の採石が禁止されて久しく、市場で見かけることはほとんどありません。そのため「老坑はあっても、白端は手に入らない」と言われています。その希少性から、白端の値段は坑仔巖を圧倒しています。

水帰洞のために憤慨する

「老坑」は古来よりその名が知られています。数多くの採石支洞があり、東洞、正洞、小西洞、大西洞、水帰洞などがあります。なかでも「大西洞」、「水帰洞」が最も有名で、その名は広く天下に知れ渡っています。

筆者は幸運にも、1997 年から何度も老坑「大西洞」と「水帰洞」に入る機会に恵まれました。

世間では水帰洞よりも大西洞で採れる硯の方が優れているという説があります。関連する論述や収蔵専集、オークション目録、雑誌広告などを見たところ、総じて大西洞の方が値段が高くなっています。店も収蔵家も研究者も引き写し作家までも、みな大西洞のことばかりです。

双方を比べてみると、水帰洞はまるで「宮中の奥に取り残された側室」のように冷遇されています。小生はこの不平等に「筆を執り」、水帰洞のために義憤を晴らそうと思います。

「大西洞」に対する高い評価には、歴史的背景があります。実際、石質を見ると、「大西洞」は大変素晴らしいものです。しかし、老坑の誉れは「大西洞」だけのものではありません。記録によると、明末清初、老坑の「大西洞」が開かれ、採石が始まると、その質の細かさ、石品の豊富さから、その評判はあっという間に広がり、朝廷をも驚かし、文林が沸き立ったそうです。その評価はまるで天子の衣をまとったかのように、みなをひれ伏させました。文人墨客たちはみな恋い焦がれ、夢の中でも、まるで宮中の奥深くにいる美人のような「玉のようにつやつやした肌」に思いを馳せました。みな筆を揮って大西洞を称える詩文を書きあわすことが流行し、ほとんど天地を覆い隠すほどでした。しかし、これもただ流行に乗り遅れて、学識が浅く見聞が狭いと誹られるのを恐れてのことです。

老坑の栄誉だけでなく、「大西洞」の評判も大いに高まりました。このようなめぐり合わせ

は本当に千載一遇のものです。「石品の模様」の論述に関しても、この時期、百家争鳴の時代に入りました。

その後、老坑の採石区は徐々に「水帰洞」へと進みました。「水帰洞」が世に出ると、石質が大西洞に似ているため、双方を比較して、驚かないひとはなく、「その評価」も当時の「大西洞」に劣らないものでした。

この頃、筆を執り、水帰洞を称え、歌に詠み、文章を著したひともいましたが、結局は後に続く者がなかったために、いまのこの有様で、「水帰洞」は冷や飯を食わされるところとなったのです。

地理的なことを言うと、老坑の新洞口から大西洞へと入ります。その左側が水帰洞となる場所です。老坑は地形が低いため、採掘する際には水を汲み出す必要があります。汲み出された水はやがて小さな池になりました。つまり「水の帰える所」です。その後、採石区がその場所に移り、こうして「水帰洞」となりました。もし当時誰かが記録していなければ、今日「水帰洞」の名称は存在していなかったでしょう。「大西洞は水帰洞より優れている」という説はなおさら存在していないことでしょう。

「大西洞」と「水帰洞」の石質の特徴には違いがありますが、その優劣はつけがたいものです。大西洞の石は青系で、水帰洞は赤や灰色がかっています。しかし、採掘の時期ごとにまた異なっており、時には採石のベテラン職人ですら見分けられないこともあります。一般人ならなおさらのことです。

「水帰洞」と「大西洞」は隣り合っているために、ひとつの採石区だということもできます。1972年に「老坑」の採石を再開した当初は、「大西洞」に絞って採石し、その後徐々に「水帰洞」へと進出していきました。長期にわたる開掘で上下左右へと伸びた採石区域は、ついには二つの区域が一つの大きな洞となり、それ以来「大西洞」や「水帰洞」の区別はなく、ただ「老坑」と総称されるようになりました。

もし「洞」で分けて考えようとしても、1972年以降、水帰洞と大西洞の採掘量を分けて比べることはできません。しかし、市場の至る所で大西洞の名を耳にすることはあっても、水帰洞の姿を見ることはめったにありません。水帰洞は「市場操作」によって消されてしまったのです。

これは実におかしなことです。なぜ大西洞ばかりがそんなに多いのでしょうか。どれだけの人が大西洞を知っていて、どれだけの人が水帰洞を知っているのでしょうか。どうして水帰洞を知らずに大西洞だけを知ることができるのでしょうか。

ここまで書いて、上海蟹の「陽澄湖」現象が思い起こされます。まったく同じやり方です。

秋が深まり、蟹が太り卵を抱える頃、まさに蟹の美味しい季節です。昆山「陽澄湖」の蟹はその名を広く知られており、蟹を愛する食通が追い求める食材です。昆山陽澄湖では 1 畝（約 6.67 アール）あたり、通常毎年 120～150 匹しか上海蟹を生産することはできません。陽澄湖全体の年間生産量はおよそ 800 トンで、そのうちの 50%は輸出され、市場に出回る「本物」の陽澄湖産の上海蟹はほんのわずかしかなかった。

商売人の悪知恵は素早いもので、上海蟹に「陽澄湖」産の札さえつけば、値段はたちまちに上がります。そのためひと頃、湖北省洪湖、江西省鄱陽湖、安徽省巢湖、江蘇省太湖などがすべて陽澄湖の分身となり、捕れる蟹はすべて「陽澄湖」産の上海蟹となりました。あるものは陽澄湖水に何日かつけてから水揚げして「陽澄湖産の上海蟹」を装うといった始末です。閑話休題。老坑「大西洞」現象に話を戻すと、おそらく賢明な読者諸氏はもうお気づきのことでしょう。

「陽澄湖」の上海蟹を知らなければ、盲目的に上海蟹を求めてはなりません。同じように、老坑をよく知らないのであれば、盲目的に大西洞を求めてはならないのです。

市場で価格を示して金銭に変えられるものはすべて「商品」です。「商品」の価値は市場の需給によって決定されます。

長年頻繁に硯の里に出入りして、「大西洞」が「水歸洞」よりも優れているという話を耳にしたこともありますが、しかし、老坑の価値を決めるのは、採れた「洞」ではなく、石質の優劣です。「二つの洞」の石質の違いはほとんどありません。この事実と世間で言われる「大西洞だけが優れている」という見方には、とても大きな隔たりがあります。

この隔たりは商売人の悪知恵と、家に閉じこもってただ引き写すだけの「剽窃家」の書いた本が生み出した結果です。

芸術品の収集は、常に騙し合いと誤謬にあふれているものです。その原因は、収蔵家の虚栄心と、利益に目がくらんだ商売人の心が生み出したものにほかなりません。

両者は肉にわいた蛆のように、互いに利用し合っているのです。信じられなければ、その辺の収蔵集を見てみるといいでしょう。坑仔巖を老坑と誤って鑑定している輩はいても、老坑を坑仔巖としている者はいません。年代についても、古いものに傾きがちで、清代の硯を明代の硯とする者はあっても、明代の硯を清代の硯だとするひとはめったにいません。端溪硯なら「老坑」に偏り、そしてなんでも「大西洞」となってしまいます。人間の貪欲さと虚栄心の大きさが余すところなく表れていると言えるでしょう。

道理で、収蔵家を自称する人たちが、高い授業料を払ってもなお、門の外で足踏みをしているわけです。それもこれも、商売人は嘘を言い、収蔵家も本当の話を聞きたがらないからです。嘘を並べ、虚栄を張ってばかりでは、いつまで経っても無知のままで、ニセモノの硯、質の悪い硯が街中に溢れかえって当然です。

市場でいかさまが横行しているのは、商売人のあくどさもありますが、いつまで経っても学ばない収集家が多すぎるのも原因のひとつです。収集について、もし謙虚に学ぶことができれば、いい鴨にされるようなことはなくなるでしょう。

いま、心を込めてこの短文を書きましたが、そこにはまたいくらかの悲壮感が込められています。

大西洞と水帰洞は、老坑の洞内で隣り合う採石区で、石脈は繋がっており、そのため二つの洞の石質をはっきり分けることはできません。簡単に言ってしまうと全てが老坑ですが、細かく言うと、老坑の洞内は東洞、西洞、小西洞、大西洞、水帰洞などに分けられます。さらにこの分け方に従えば、麻子坑、坑仔巖にもそれぞれいくつもの洞があり、そんなことを言い出せば、端溪硯専門家などどこにもいないことになってしまいます。

端溪硯の音

端溪硯の鑑定で、「声辨」（音で判別すること）は重要な要素です。石の音が響くか籠もるかで、産出された坑、及び石質の優劣を鑑別します。やり方は、硯を持ち上げて、硯の縁を指先で弾きます。ちょうどスイカを買う時に実が詰まっているか確かめるのと同じです。石質が異なれば石の音も異なります。

端溪硯の音をまとめると、「金属音」と「非金属音」に分けることができます。

「金属音」とは金属のように響く音で、叩くとキンキンという音がします。「非金属音」とは籠もった音で、俗に「瓦声」あるいは「木声」といいます。さらに細かく分けると、瓦声はまた「堅瓦」（堅い瓦）と「破瓦」（割れた瓦）の音に分けられます。木声もまた「乾木」（乾燥した木）と「湿木」（湿った木）の音に分けられます。

石の音の分類は多少抽象的なところがあり、完全に科学的に分析できるものではありません。硯は大きさ、厚さがさまざまのため、音もさまざまで、豊富な経験と教材による十分な実体験がなければ、その深遠を体得することはできません。

石の音で石質の優劣を鑑定する方法は、すべての硯に通用できます。しかし、硯によってその基準は異なります。

端溪硯と歙州硯について言うと、両者の判断基準はちょうど正反対です。一般的に、歙州硯の良いものは金声がして、それに次ぐのが瓦声。木声がした場合は、割れているか、ひびが入っているので買ってはいけません。

端溪硯の場合は木声の価値が高く、瓦声がこれに次ぎ、金声は下がります。「木声を貴しとなす」という点に関してはもっと整理をしなければなりません、石の音は端溪硯の坑を鑑定するのに大変参考になります。

実験を通じてわかったことは、金声の硯は、一般的に石質が堅く、硬度が高く、石の色は比較的濁っており、磨墨の効果が劣ります。瓦声のものは、一般的に石質が比較的きれいで、構造が緻密で、硬度も適度で、墨を磨るのに適しています。木声のものは、一般に老坑に多く、石質は柔らかく、石品が豊富で、金銀線が多く、氷紋のものが多く見られます。実験結果をまとめると、老坑のうち少数が木声で、大部分は瓦声で、金声はほとんどありません。坑仔巖は瓦声が多数を占め、木声と金声は比較的少ない。麻子坑は大多数が籠もった瓦声で、音が弱く、老坑や坑仔巖の瓦声とは異なります。宋坑は瓦声が主で、緑端、梅花坑、白線巖は瓦声が多く、金声は比較的少ない。沙浦坑には金声が多く、瓦声は比較的少ないです。

端溪硯の鑑定は、単に石の音だけで決まるものではないので、さまざまな要素を総合的に判断して決定しなければなりません。

木声の秘密

端溪硯の鑑賞において、「木声貴し」という観念は人々の心に深く刻み込まれています。これは「木声」が老坑に多く見られるためです。しかし、老坑が名坑であるが故に、余計に人々を誤った方向に導いてしまい、さらに受け売りの話で噂が広まり、「木声」＝「老坑」という図式ができあがってしまいました。そして、それがさらに膨らんで「石質が優良なもの」ともイコールで結ばれるようになってしまいました。これは端溪硯鑑賞をひどく間違った方向に誘導するものです。

木声は老坑によく見られます。しかし、老坑のすべてが木声ということではありません。物理特性から考えて、端石の密度と硬度が高いものは必ず堅く響きます。反対に、硬度の低い石は籠もった音がします。金属や陶磁器、紫砂や木などを実際に叩いてみるとわかんと思います。

端石は柔らかい（硬度が低い）ために、圧力や揺れに弱く、「地殻運動」によってひびが生じます。これらのひびに、絹雲母を主成分とする鉱物が高温によって気化して入り込み氷紋となり、酸化鉄と炭酸塩が入り込み、それが長年の水による浸食によって、金銀線と鉄線になりました。こういった名品は多かれ少なかれすべてひびが隠れており、そのため、叩くと

「鈍い」木声がするのです。磁器にひびの入っている音が聞こえると「啞然」としますが、それとは意味合いが異なります。

経験から言って、三大名坑のうち、石質がきれいで、きめ細かくてつやがあるものには瓦声が多く、木声はきわめて少ないです。木声は老坑に多く見られますが、全ての老坑が木声というわけではありません。老坑といってもそれぞれの鉱物成分、密度、硬度はすべて異なっており、当然、石の音も異なります。老坑は少数の木声を除くと、その大部分は瓦声で、金声はわずかです。

「石品」で分けると、三大名坑のうち、天青、蕉葉白、魚腦凍、青花などの「四大名品」は、瓦声が多数を占めています。木声がする硯には、一般的に、鉄線や金線、銀線、氷紋がありますが、不幸なことにこれはひびがあるということでもあり、「木声貴し」の誤りはまさにこの点にあります。

科学的にみて、「石質の弱さ」と「ひび」が原因で「木声」がします。石質が弱いために「ひび」が発生しやすいからです。採掘する際に爆破したり、槌でノミを打ち込んだり、さらには運送の過程の震動などでもひびが生じます。石の中にひびがあることで音の伝わりが鈍くなり、「木声」がするのです。

私たちが「木声」を理由に端溪硯を選ぶ時には、後日後悔しないためにも、先ず石に隠れた傷やひびがないかよく見定めた方がよいでしょう。

水しぶき飛び散る滝のような氷紋凍

「氷紋」は、端石が岩になる過程で発生した細かい「ひび」に、高圧、高温の環境下で鉱物の「水雲母」が「絹雲母」となり、石の「ひび」の間に入り込み、「氷紋」、「氷紋凍」となったものです。

「氷紋」は白色のぼんやりとした線の紋様で、ぼやけた銀線のように、線のように線でなく、紋様のようで紋様でない。手で撫でても凹凸のような感触はなく、墨を磨るのにも影響しません。ちょうど、氷の中のひびのように、そのため「氷裂紋」とも呼ばれます。

右頁のような面積の大きい「氷紋」は、水しぶきの飛び散る滝の様に、あるいは冬空に舞う雪の様に、入り乱れて舞い飛んでいます。一面全て真っ白で、これが衆人垂涎の的である「氷紋凍」です。老坑の「独品」で、老坑以外の坑では見られず、愛硯家が争って求めるもので

す。

老坑を収蔵していても、その特徴が明らかでなければ、みな口々にいろいろと言ひ、心中混乱しますが、ただ「氷紋凍」だけは誰も疑うことはありません。そのため、老坑の「開門見山」（門を開けたら山が見える。そのものずばり）の代表となっています。これも氷紋凍が「人気度」で大きくリードしている要因です。

上等な「氷紋凍」は端溪硯の「最優秀手触り賞」の受賞者と言うべきもので、その石質はきめ細かくつやがあり、柔らかで、手触りがやさしく、撫でるとまるで美人の肌のように人の心を揺り動かし、「魂が抜ける指数」も上昇することでしょう。愛硯家たちもその肌に触れることを夢に見ない者はいません。

氷紋、あるいは氷紋凍の中には、多かれ少なかれみな金、銀線あるいは細微裂紋が混じっています。これは、石質の「純浄、堅実」の面から見ると、完璧ではないことになります。もし質、色ともに良く、完璧な「氷紋凍」であれば、「最高級品」であり、言うまでもなく高価なものです。

老坑以外にも、坑仔巖、麻子坑、朝天巖にまれに氷紋が見られます。しかし、それらは老坑の氷紋凍の「しなやかで美しくて入り乱れている」ものとは明らかに異なります。注意して欲しいのは、老坑以外のその他の坑から氷紋が見つかったならば、それは「ニセ老坑」を作り出す絶好の機会だということです。まさに一儲けするチャンスなのです。読者のみなさん、くれぐれも騙されないように気をつけてください。

売り手は買い手に如かず、買い手は収蔵家に如かず

収蔵は富をもたらします。しかし「収蔵が富をもたらす」という考え方は、一般の人にはよく理解できないことです。収蔵によって富を得る前提は、「正しい収蔵」です。それはすなわち「収蔵品」を正しく選ぶ力ということです。

2000年のこと、筆者は肇慶で1万円の老坑の板硯を一面購入しました。この硯は真四角で、石質はきめ細かくつやがあり、石品も豊かで、まさに老坑の一級品でした。私はこの幸運な出合いを喜び、すぐに端溪硯の権威である劉演良先生に銘を書いていただき、ますます貴重な硯となりました。

しかし、この硯はとても良いものであったために、もとの持ち主はこの硯のこが忘れられず、

結局半年後、1.6 万元でもとの持ち主の元へ帰って行きました。数年後、今度は上海のある店にこの硯が現れました。2005 年、この硯は 9 万元である収蔵家のものとなりました。しかし翌年、またその店に 20 万元の大金で買い戻されました。聞くところによると、その硯はまたすぐに 30 万元で売られたそうです。わずか 6 年の間に 1 万元から 30 万元へと、30 倍も値上がりしてしまいました。これはまさにマネーゲームとしか言いようがありません。収蔵はマネーゲームであるばかりでなく、「目（眼力、目利き）」の競争でもあります。そのため、ゲームをすればするほど富む人がいる一方で、すればするほど貧しくなる人もいます。肝心な点は「目」であり、如何に「良い品」を見極めるかにかかっているのです。

この硯の流転のなかで、私も一旦は所有者となりましたが、その利益は最も小さいものでした。友人たちはこの話を持ち出して、「売れば売るほど貧しくなる！」と私をからかいます。しかし、このゲームはまだ終わっていません。「売り手は買い手に如かず、買い手は収蔵家に如かず」なのです。数年後もっとも確かな利益を得ているのは、もっとも長い期間その硯を所有した人だということは疑いのないことでしょう。

古硯と新硯

芸術品の収蔵において、領域が異なればそこには垣根（壁）が存在します。長い間、古硯と新硯の収蔵の間には、明確な壁が存在し、その固定観念（イデオロギー）を壊すことは不可能でした。「イデオロギー」は人の理性的判断に容易に影響するもので、宗教や政治、芸術全てにおいて影響します。一旦「イデオロギー」が働いてしまうと、たくさんの基準がそれによってねじ曲げられてしまいます。

テレビの政治討論番組では、深い学識と高い見識を持ち合わせた専門家たちが、政治の観点が異なるために、耳まで真っ赤にして言い争い、上品な婦人が「気の強い女」に豹変し、教授が「叫ぶ野獣」となり、観衆はあっけにとられ、血圧が上がり、興奮の余り血管が切れんばかりです。

芸術品の価値を決めることは、個人の嗜好以外にも、認知上の相違があります。

新硯の収集家は、古硯の鑑定には複雑な考証が必要で、膨大な工程があり、書画に対する知識や、文学、歴史に対する見識、彫刻に対する理解なども必要だと考えています。さらに、市場のあやふやさ、真贋鑑定の難しさなど、気をつけていないとすぐに地雷を踏んでしまうのではないかという恐れもあり、自然と敬遠してしまうのです。

反対に、古硯の収集家は、新硯は高くなくも古くもなく、石材は坑や谷に満ちていて尽きる

ことがないと思っており、新硯を収集するのは頭がぼんやりしているからだと考えています。このような考え方では、当然、新硯を見ても一顧だにしません。

イデオロギーは大きな帽子のようなもので、俗に、笠を被らなければ空が見える、笠を被れば地面しか見えないと言います。目を覆っていては、必ず知識の隔たりが生まれてしまうのです。

【帰研斎】では求めに応じて古硯の鑑定を行っていますが、残念なことに、そのほとんどがニセ古硯です。なかには本物もありますが、傷みが激しいものや、石質の劣るもの、彫刻の拙いものが多く、良品はほとんどありません。筆者は立場上、同業者からの恨みを買うことがないように、言葉を選ぶようにしています。時折、勇気を出して意気揚々と率直に伝えて、順序立てて説明しても、往々にしてあまりよい効果は得られません。それほどイデオロギーというのは崩しがたいものなのです。

古を貴びながら、古に囚われるのは鑑賞力の足りない人々です。それは、自らニセ硯を増やし、悪徳商人に多くの利益をもたらしていることになるのです。

実のところ、古硯、新硯に関わらず、良質な硯というのはなかなか手に入らないものです。端溪硯、歙州硯、鶏血石、田黄、和■（門に真）白玉、翡翠などもみなそうです。最高級の逸品の価値は、その古さにあるのではなく、肝心なことは「良い」ものかどうかです。

ひとの好みはそれぞれで、芸術の審美観もそれぞれです。しかし、それでも互に通じる部分はあって、それを参考にし、補完することができます。

新硯の収集に、古硯の長所を汲み取ることはできます。「硯味」（硯の持つ趣）を守り、人文程度を高めることができます。芸事にはみな決まった型があります。それは収集も同じで、古硯の収集は新硯を基礎とすべきで、坑、石質に対する知識を深め、新しいものから古いものへと順を追って進むのがよいでしょう。新硯に関する知識の基礎の上に、「つるをたどって瓜を採る」ようにすれば、古硯の鑑賞に大いに益することでしょう。

これは古い書画の収集でも同じで、新しい書画に関する知識の基礎があった上で古い書画を見ると、落ち着いて鑑賞することができるのです。

古硯、新硯にはそれぞれの特徴があります。読者のみなさんはすでにご存じのように、古硯の石質は一般的に新硯よりも劣ります。沙浦坑、梅花坑、宋坑、緑端などがそうです。麻子坑と坑仔巖は出合えたとしてもすでに「硯福浅からず」、老坑はたとえ見かけたとしても滅多に手に入れることはできません。

もちろん、古硯にも彫刻が精巧で美しいものは少なくなく、長い歴史と、その時代の風格をそなえ、実用的な価値と芸術の美を見せてくれます。もしも名家の署名があれば、その歴史的価値はさらに高くなり、オークションで最高落札額の記録を更新することでしょう。これ

は新硯ではあり得ないことです。

しかし、古硯にも欠けてしまったり、彫刻が粗雑であったり、名家の偽物の署名がつけられていたり、あるいは銘文が稚拙で見るに堪えないものであったりといったものがあります。古いものを貴ぶ余り盲目的に古いものを良しとして、本当の価値がわからなくなってしまうはなりません。

芸術品の収集において、古いものと新しいものは同じ流れのなかにあるもので、分けて考えることはできません。同様に、古い時代を重視して今のものを軽視したり、また新しいものを重視して古い時代を軽視したりしてはなりません。今の古いものも昔は新しいものでした。芸術品には、新しいや古いといった区別などありはしないのです。ただ「美しい」ということによって、それは時空を超え、新しい古いといった垣根を越えて、人の心を魅了するのです。

付録 徽墨について

昔から、墨では「徽墨」が最も有名です。宋の宣和三年に徽宗皇帝が「歙州」を「徽州」と改めて以来、この地で作られた墨は「徽墨」と呼ばれ、現在でも「徽州」は墨の一大産地です。

良い硯は、それに見合う良い墨があって、はじめて墨を磨る効果と楽しみを味わうことができます。書を書き、画を描くには、「墨韻」が大切です。そのためには良い墨を磨るのが一番です。墨汁ではその効果を得られません。

「墨韻」とは、紙の上に表れる墨の効果です。「墨韻」は書画の「骨」（骨気）であり「神」（神韻）です。優れた「墨の立体感」や超然とした「紙と墨の響き合い」は、一般的な墨や二級品の紙で表現できるものではありません。

墨汁が登場したことによって、墨（固形墨）の地位は徐々に弱くなり、墨を磨って字を書くことは「伝統文化」になってしまいました。墨を磨る人が少なくなって、墨を作る技術も衰退していき、良い硯も少なく、良い墨は手に入りづらくなりました。

古人は良い墨を評して、「玉のように堅く、磨っても音がせず、持ってみると軽く、香りがよく、墨の色は清らかで、紙に落とすと漆のように黒く、長く保存することができる」と述べています。

墨の主な原料は「煤」と「膠」（にかわ）です。

「煤」とは何かという、かまどで薪を燃やすと鍋の底一面に黒い粉が付着します。これが「煤」です。鍋底の煤は熱伝導に影響するため、一定期間ごとに擦り落として、煤を除去しなければなりません。薪に松の枝を使っていれば、その煤は「松煤」です。しかし、このように高温で炭化した煤は、墨をつくるのには使えません。

製墨に使う煤は、主に油煙、松煙、漆煙で、これらはまた墨の種類の名前でもあります。そのほかに特殊な墨があり、朱墨、包金墨（金巻墨）、五彩墨、藥墨などがあります。

油煙墨の煤の原料には、動物性の豚油、魚油、植物性の菜種油、大豆油、ごま油、桐油などがあります。そのほか、鉱物性の石油、及び工業燃油の煤があります。油煙は油を燃やして煤を採取します。伝統的な方法は灯明によるもの（芯焚き法）です。現在では、改良された気化炉によって煤を採取しているところもあります。通常、100 キログラムの油から6 キログラムの煤が取れます。高級な墨になるほどより細かな煤になり、採取できる量も少なくなります。

「5 百斤油」と言う墨がありますが、これは 500 斤の油から墨一本分の煤を採取するという触れ込みです。宣伝文句なので、本当にそうだと信じてはいけません。

油煙墨は桐油煙が最も良く、墨色は黒く光沢が長く保ちます。桐油は桐の木を搾ってとれる油で、それを燃やして煤を取ります。

最も安価なものは石油煙で、これは石油を精製した後に、重油を燃やして得られる工業用油煙です。この種の油煙墨は字を書くのになんとか使えますが、画では墨韻の立体感が今ひとつ良くありません。

松煙墨は松の枝を燃やして煤を採取したものです。松の木には大量の松節油（テレピン油）が含まれています。古代の徽墨は黄山の松から作られていましたが、生態保護の意識の目覚めとともに、黄山の松で煤を採取することはなくなりました。また牢屋に入る危険を冒してまでも松を切りに行くひといいません。現在、徽州の松煙の原料はすべて別のところからとられたものです。

墨は煤の違いによって、特長と用途が異なります。松煙墨は画を描くのに適しており、艶を感じさせません。油煙墨は書を書くのに適しており、黒々として艶があります。

漆煙墨は桐油に生漆を加えて燃やして採取した煤で、この方法は今でも広く用いられています。五彩墨と朱砂墨は通常、絵画に用いられます。特殊墨には茶墨と青墨があります。茶墨は墨に中国画の顔料である「赭石」を加えたもので、墨の色がやや珈琲のような色をしています。画を描く時の特別な効果のために使用します。青墨は「花青」を加えて、墨の色がかすかに青味がかり、山水画を描くのに適しています。工業用のカーボンブラックは主に低級な墨や墨汁を製造するのに用いられます。

「膠」の種類もたくさんあり、鹿の膠が貴重で、現在、製墨で良く用いられているのは牛皮膠、骨膠、魚膠、アラビアゴムなどで、等級の低いものは化学合成されたプラスチックのりやアクリルのりが使われています。良い煤には良い膠を用いるのが、良い墨を作る最も重要な条件です。

製墨の主要な技術は「和膠」（膠を混ぜること）にあります。膠は墨の原料のおよそ 50%を占め、比重が重く、膠は重く煤は軽いものです。上等な墨は、煤が膠より多く、中級品の墨では煤と膠が半々で、低級品の墨では煤よりも膠が多くなっています。

膠は凝固剤の一種で、コンクリートのセメントと同じような役割です（コンクリートは、セメントに砂と砂利、水を混ぜて硬化させたもの）。膠が多ければ墨は硬く、磨ってもなかなか墨が下りないという欠点があります。膠が少なければ墨は柔らかくなります。古人が「良墨は持つと軽い」と言うのは、「膠が軽い（少ない）」ことの重要性を強調するものです。膠の少ない墨を持つと軽いので、これは墨の優劣を判断する一つの方法でもあります。

街中で偶然膠の少ない柔らかい墨を手に入れることができれば、すぐに墨が下りるので、現代人の「高効率」にとっても合っています。膠が少なければ磨りやすいのですが、しかし、膠が少な過ぎると固定が弱く、書画を表装する際に、墨が散りやすく、せっかくの作品がダメになってしまいます。

また膠の少ない墨は、保存している時にひび割れやすく、ひどいものはばらばらに割れてしまいます。古人は粗悪な墨を「磨ると泥のよう」と評しています。これは墨が緩く柔らか過ぎることを指しています。原因は膠が少な過ぎるのと「杵」（煤と膠の混ぜた後、杵で叩いてよく練り合わせる）が不十分なためです。

優れた剣を形容して「鉄が泥のように切れる」と言いますが、硯も柔らか過ぎる墨では、同じく「墨が泥のように溶ける」と感じることでしょう。これは墨を消耗するだけでなく、墨韻の立体感も望めないでしょう。

古人に墨を称えて「玉のよう堅く、多くの人が使っても少ししか減らない」の句があります。また「良墨は磨っても音がせず、墨のおりるのが遅い」と言います。この「墨のおりが遅い」というのは、墨質が緻密で、玉のように堅いことの形容です。磨っても「墨が減らない」と「長い時間磨っても墨がおりない」とはまったく違う意味です。

良墨は膠の調合が適切であるだけでなく、膠の脱脂と防腐技術が適切でなければなりません。脱脂がうまくできていないと、墨を磨ると泡がでて、粘りがでてしまい、筆がうまく進みません。また、膠の防腐技術がうまくできていないと、墨が腐敗しやすくなります。良い墨は磨っても音がなく、墨色は清く澄んで、人が映るほど黒く光り、筆に墨をつけると水のように、筆墨が心地よく、思うままに筆が動き回る効果を存分に感じることができます。

古代の製墨は、原料の中に貴重な漢方薬と天然の香料が使われています。それによって、墨のよい香りを保ち、書画が虫に食われるのをふせぐことができます。このような墨で書画を書いて部屋に飾ると、部屋いっぱいに良い香りが漂うことでしょう。

古い製墨方法でよく使われる漢方薬と香料には、梣皮、黄蘗、丹蔘、黄蓮、烏頭、麝香、公丁香、龍腦（また冰片ともいう）などがあります。墨に加える漢方薬と香料には、防腐、防虫効果のほかに、気分が爽やかになり、病気を治す効果もあります。例えば麝香は、雄の「ジャコウジカ」の香囊から得られる分泌物を乾燥したもので、その香りには拡散の性質があり、詰まりを治し、通りをよくして、血行をよくし、経絡の滞りを解消し、痛みを止める効果があります。

昔から書画家に長寿が多いのは、書画の修身養性の賜であるほかに、常に墨に含まれる貴重な薬材を嗅いでいることと無関係ではありません。かつて、薬墨があり、磨って酒と一緒に飲むと病を治すことができました。しかし、今の墨はほとんどに人工の防腐剤、防かび剤、化学芳香剤や合成香料などが添加されているので、口にしない方がよいでしょう。具合が悪くなるかも知れません。

そのほか、墨に使われている添加剤として、金箔、銀箔、真珠粉、猪膽（豚の胆汁）などがあります。これらには光沢を高める効果があります。

時代の変化によって、墨は観賞收藏品となりました。收藏された墨は一般的に全て「收藏して使わない」もので、まれに墨の優劣を検証するために磨られる機会がある程度です。

不心得の店はこの点を利用して、劣墨で堂々と商売をしています。墨を買うのに試しに磨ってみることはできないので、ただ店を信用するか、運任せにするしかありません。

様々な原因から、劣墨を製造する所もいくつもあります。特に観光地にある工芸品店には、きれいに包装された墨がたくさん並んでいます。しかしどれも「見た目はいいが役に立たない」ものばかりです。財布を取り出す前にもう一度よく考えた方がいいでしょう。

墨を買うのに、ブランド名に頼ってはいけませんし、同様に墨の標示を信じてはいけません。油煙 101、超頂漆煙、超細油煙といった標示です。昔から、お金になるものであれば、偽物を作る輩がいるのです。

筆者は、良い墨を買うため、墨についてしっかり理解しようと収集した徽墨は百種を下りません。有名な「鉄斎翁書画宝墨」も十数種あり、いろいろなメーカーで製造されたものもあり、種類も油煙、松煙、工業用カーボンブラックがあり、品質の優劣も一様ではなく、甚だしきに至っては磨ることすらできないものもありました。

中でも私が一番驚いたのは、包装が最も精巧で美しい「鉄斎翁書画宝墨」です。その品質は最悪で、磨ってみるとガリガリと音を立て、硯堂が傷だらけになってしまいました。一番腹立たしいことは、こんな劣墨を買ってしまったという事実です。後に知ったのですが「鉄斎翁書画宝墨」は上海墨廠の製品で、それ以外で作られたものはみな偽物だということです。

私は経験から、市場の観賞墨の大部分は「外側は金や玉でも、中身はぼろ」だということを学びました。元々、墨はすでにあまり使われなくなっているにも関わらず、市場には偽物が横行しており、こんな状況では多くの人が墨汁を使うのは当然のことで、それが、製墨産業が衰退していく原因となっています。

墨を買うのに有名なブランドだからといって手を出してはならず、また外見や包装だけを見てもダメで、大事なの中身なのに、中身は見え、その善し悪しは磨ってなければわからない。まるで男女の恋愛と同じで、相性は付き合ってみるまでわかりません。

墨の鑑定の難しい点は試し磨りができないことで、磨ってみなければその品質を確かめることができないのです。もし試し磨りをしたのに買わなければ、店にとっても悪い気がします。墨を選ぶもう一つの難題は、良い墨を買って、その後また同じものを注文すると、今度はあまり良くないことがあります。これはメーカーが騙そうとしているのではなく、品質管理がうまくできないためです。これは伝統産業に共通する欠点でもあります。

墨を選ぶ困難を克服するただ一つの方法は試してみることで、それ以外にはありません。

試墨すれば墨のおり具合や品質の善し悪しがわかります。墨がおりない、泡が出る、がりがりと音がする、墨の色が濁っていて光沢がない、嫌なにおいがするなど、全てダメな墨です。そんな劣墨やメーカーは、この世からなくさなければなりません。